自民 山陰4議席独占

民主 比例含めゼロ

第46回衆院選は16日投開票され、山陰両県4小選挙区は自民党が独占した。鳥取1区は、自民党前職の石破茂氏＝公明党推薦＝が共産党新人の塚田成幸氏らに圧勝し、9選を果たした。同2区も自民党前職の赤沢亮正氏＝同＝が民主党前職（比例中国）の湯原俊二氏、共産党新人の福住英行氏を退け3選。島根1区は自民党前職の細田博之氏＝同＝が8選し、同2区も自民党前職の竹下亘氏＝同＝が5選を決めた。民主党は比例中国ブロックでも復活できず、議席ゼロに終わった。両県の投票率は鳥取県が前回選に比べ12・38ポイント減の62・92％、島根県は12・61ポイント減の65・74％で、ともに戦後最低となった。

3選を果たし、万歳して喜ぶ赤沢亮正氏＝16日午後8時21分、米子市加茂町1丁目、事務所

自身の名前に花を付ける自民党の石破茂氏＝16日午後8時53分、東京・永田町、自民党本部

鳥取

1区 石破氏 圧倒12万票
2区 赤沢氏 再対決圧勝

1区

自民党前職の石破茂氏が、固い支持基盤と知名度で共産党新人の塚田成幸氏らを圧倒し、9選を決めた。民主党が候補擁立を断念したこともあり、得票率は1996年の小選挙区比例代表並立制導入以降、最高の84・50％に上った。

石破氏は野党転落の反省を前面に出し「謙虚、誠実、正直で丁寧な党に再生する」と信頼回復をアピール。農業、建設業など約120の党支持団体から推薦を受け、前回選で背を向けた自民党支持層を引き戻した。

加えて党内派閥に属さない刷新感や、外交・安全保障分野の主張が耳目を集め、不戦敗に甘んじた民主党の支持層や若年層にも浸透。課題とみられていた公明党支持層への働き掛けも、陣営が自公政権復帰の機運を高めて手堅く取り込み、盤石の戦いを見せた。

公示後は党の顔として他候補の応援に駆け回り、選挙区に戻らなかったものの、陣営は8割後半の得票率を目標に、街頭で党支持層以外にも働き掛けた。

塚田氏は、石破氏が唱える国防軍の創設を批判。比例での議席獲得を重視し、憲法改正反対、環太平洋連携協定（TPP）の交渉参加反対、原発の即時廃炉を訴え、自民党批判票の吸収を目指した。

しかし、抜群の知名度を誇る石破氏の前に劣勢を強いられ、共産党支持層以外への広がりを欠いた。原発反対や消費税増税反対を唱える政党の乱立も埋没感に拍車を掛けた。

無所属新人の井上洋氏は大敗した。

2区

前回選で626票差の激戦を演じた自民党前職の赤沢亮正氏と、民主党前職（比例中国）の湯原俊二氏との再対決は、赤沢氏が自民党支持層をまとめ3選を果たした。共産党新人の福住英行氏は引き離された。

赤沢氏は野党転落に対する反省の弁と同時に、党の政権担当能力を主張。国土強靱化計画などの政権公約も丹念に説き、国の再生を強調した。

陣営は組織戦を展開し、40の地域支部と党県議・市町村議、後援会がフル稼働。公明党の推薦を得ると同時に、企業、農業団体などから約100の推薦を取り付け、前回選で離反した党支持層を取り戻した。

民主党支持層を切り崩すため、街頭活動にも比重を置いた。前回選で湯原氏に3136票差で敗れた米子市では、公示直前の石破茂党幹事長の応援で勢いに乗って1万8千票以上の差をつけ、全11市町村でトップに立った。

湯原氏は子ども手当の創設など民主党政権の実績を強調。「自民党が政権に復帰すれば古い政治に逆戻りする」と政権継続を訴えた。

しかし、民主党に対する有権者の不信感を払拭できず、米子市などで苦戦。子ども手当に共感する主婦層の一部に食い込み、支持母体の連合鳥取が終盤に組織の引き締めを図って追撃したが、及ばなかった。

福住氏は原発の即時廃炉などを訴えたが、赤沢、湯原両氏の激突の前に存在感を示せず、党公認候補の擁立を見送った前回選のブランクを克服できなかった。

テレビ欄は12面

鳥取選挙区開票結果

1区（16日午後11時29分、選管最終）

当124,746票	石破	茂	55	自前
17,550票	塚田	成幸	48	共新
5,325票	井上	洋	63	無新

2区（16日午後11時29分、選管最終）

当 87,395票	赤沢	亮正	51	自前
45,728票	湯原	俊二	50	民前
10,584票	福住	英行	37	共新

2区 赤沢 亮正（自民、前 推公明）

党国対副委員長。1984年に運輸省（現国土交通省）に入省、旧日本郵政公社職員などを経て、2005年の衆院選鳥取2区に立候補し初当選した。東京大法学部卒。米子市日ノ出町1丁目。当選3回。

当選者（敬称略）

1区 石破 茂（自民、前 推公明）

党幹事長。銀行員を経て1986年の衆院選で初当選。防衛相、農相、党政調会長などを歴任し、今年9月の党総裁選に立候補した。同月から現職。元党県連会長。慶応大法学部卒。鳥取市上町。当選9回。

島根

1区 細田氏 盤石の8選
2区 竹下氏 大差で制す

1区

自民党前職の細田博之氏が、厚い支持基盤を生かして着実に票を積み重ね、大差で8選を果たした。

細田氏は街頭で、民主党政権の外交、景気悪化を招いた経済政策を厳しく批判。「政権再交代」を掲げ、公共事業増による景気回復などを訴えた。原発問題は、安全を優先した上で稼働の必要性を強調した。民主党の「敵失」や優勢を伝える世論調査結果を受け、楽観ムードに伴う運動量不足を懸念。陣営は後半、党支部の引き締めに努めた。

民主党前職（比例中国）の小室寿明氏は地方交付税増額の実績や「2030年代原発ゼロ」を訴えたが、党への逆風で訴えが浸透せず、3年余り政権の座にありながら支持基盤を広げられなかったことも響いた。

共産党新人の吉儀敬子氏は「原発の即時廃炉」を繰り返し訴えたが、原発への批判票を取り込めなかった。

2区

自民党前職の竹下亘氏が強固な組織力を生かし、全市町で他陣営を圧倒した。

竹下氏が、終始優勢を保った背景には、夏場を含めて各地で「つじ立ち」するなど選挙区をきめ細かく歩いた豊富な運動量があった。6月以降は、200カ所で街頭演説や集会を敢行。消費税増税にも理解を求めてきた。

組織の緩みが懸念されたが、系列県議らが議会の合間に企業などへのあいさつ回りなどで支持固めを徹底。「自民王国」の健在ぶりを見せつけた。

民主党新人の石田祥吾氏は、30代の若さを売りに、選挙区内を駆け回った。しかし党への批判が予想以上に強かった上、知名度不足が響いた。

共産党新人の向瀬慎一氏は、2005年以来3度目の衆院選挑戦だったが、原発即時廃炉などの訴えが浸透しなかった。

島根選挙区開票結果

1区（16日午後11時2分、選管最終）

当112,605票	細田	博之	68	自前
47,343票	小室	寿明	52	民前
14,173票	吉儀	敬子	61	共新

2区（16日午後11時31分、選管最終）

当135,270票	竹下	亘	66	自前
48,046票	石田	祥吾	32	民新
16,442票	向瀬	慎一	41	共新

当選者（敬称略）

2区

竹下 亘（自民、前 推公明）

党組織運動本部長。1969年にNHKに入り、経済キャスターなどを務めた。85年から兄の故・竹下登元首相の秘書。2000年衆院選で初当選。慶応大経済学部卒。雲南市掛合町出身。東京都世田谷区下馬。当選5回。

1区

細田 博之（自民、前 推公明）

党総務会長。1967年、通産省（現経済産業省）入り。父の故・細田吉蔵衆院議員の秘書を経て、90年に衆院選旧島根全県区で初当選。内閣官房長官、党幹事長を歴任。東京大法学部卒。松江市堂形町。当選8回。

公明・斉藤氏7選 比例中国

比例代表・中国ブロック（定数11）は、自民党が前回選に比べ1増の5議席とし、公明党が前回選で失った2議席目を奪還した。民主党は逆風を受けて2議席にとどまり、共産、社民両党も得票が伸びず、議席獲得はならなかった。「第三極」の新党は、日本維新の会が2議席を奪取したが、日本未来の党はゼロに終わった。

山陰両県関係では、小選挙区と重複立候補した、民主党前職（比例中国）の湯原俊二氏(50)が惜敗率52・32％、同党前職（同）小室寿明氏(52)は同42・04％に終わり、前回選に続く復活当選はならなかった。同党新人の石田祥吾氏(32)も同35・52％にとどまった。

民主党は同ブロックに重複立候補した18人が、小選挙区で全員落選。前回6議席から4減の2議席に終わった今回、山陰両県の3氏は惜敗率で2位以内には入れなかった。

一方、単独立候補者では、公明党前職で、名簿1位に登載された斉藤鉄夫氏(60)＝島根県邑南町出身＝が、7選を果たした。

社民党の名簿1位だった元職の金子哲夫氏(64)＝出雲市出身＝は、2000年以来の議席獲得を目指したが、及ばなかった。